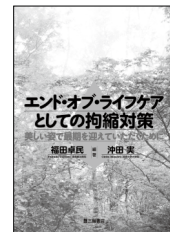


福田卓民, 沖田 実 (編著)

エンド・オブ・ライフケアとしての拘縮対策 —美しい姿で最期を迎えていただくために

守 口 恭 子
(健康科学大学, 作業療法士)



さわやかな新緑の広葉樹林の中を風が渡る。すがすがしい表紙に「エンド・オブ・ライフケア」の文字が目飛び込んでくる。「美しい姿で最期を迎えていただくために」というショッキングな副題。この本は、表紙のような林に囲まれたエンド・オブ・ライフケアを専門とする青梅慶友病院で、人間の尊厳を守り抜くために日々拘縮対策に取り組む福田卓民氏を代表とするリハ室のスタッフと、拘縮の基礎研究をする沖田 実氏のコラボレーションを実現させた稀有の書ともいえる。潇洒な装丁に比して中身はずっしりと重く、われわれは何をすべきか原点に立ち帰らせる。

寝たきりになったり、食事をしなくなった高齢者にあつという間に拘縮ができる体験を、終末期にかかわるリハ職種なら誰もがもっている。拘縮は永遠の課題で、避けて通れないものだが、私たちは結局なすすべがないと感じている。本書はそれを真正面から取り上げて実態を明らかにし、戦略や課題を読者に訴える。

まず第Ⅰ章では、拘縮対策は単に関節可動域の問題ではなく、人生の最終ステージを左右する重要な課題であるとする。拘縮は予防が重要で、解決のためには具体的

な実践を継続し、その結果の検証を繰り返すことだと述べる。第Ⅱ章は拘縮に関する基礎研究の専門家である沖田 実氏〔『関節可動域制限—病態の理解と治療の考え方』(三輪書店刊)の編著者〕が、拘縮の発生・促進因子、発生メカニズムについて概説する。第Ⅲ章の入院患者のデータは圧巻である。入院患者 1,342 名を 5 年間、入院時から 2 カ月ごとに可動域を測定し経時の変化をみた。対象とした関節は、肩関節外転、肘関節伸展、膝関節伸展、足関節背屈(経時の変化は 1 年後のみ)である。有意差を示す図表、写真……驚くばかりである。また、発生頻度の高い拘縮を写真で解説し、障害高齢者における拘縮の特徴を述べる。第Ⅳ章は治療戦略である。エビデンスを述べ、リハの治療戦略、看護・介護の治療戦略と続く。第Ⅴ章は当院の拘縮対策の取り組みがありのまに述べられ、現実的で何より参考になる。拘縮を焦点化したり、方法や手順の統一をしなければ、チームアプローチはできない。「美しい姿で最期を迎えていただく」という本書の副題は、スタッフの意識を統一するための目的の言語化であるという。そして、チームアプローチのプログラムとして、おむつ交換のとき、食

事前におしぼりで手を拭くとき、車いすに移乗したとき等、6 つのケア場面に他動運動としての一行を組み込んである。まさしくチームアプローチである。そして最後に、拘縮対策は QOL を保つことであり、皮膚や身なりの清潔を保つこと、生活の活動性を保つこと、と静かに提案する。たとえば、そのために車いすに座る、ベッド上で上体を起こす等、身体への負荷を考慮する。つまり、ケアやリハのかかわりはそのほとんどが拘縮対策に結びつく。これらの提案は、いったい何をすればいいのだろうと不安になるリハ職種を、「やっぱりそうか!」と納得させ、勇気を鼓舞する結論である。ただし容易なことではない。それにはリハがチームから信頼され、病院の生活全体がチームによって活性化されなければ実現しないからだ。

拘縮対策に取り組みながらデータを取り続けた熱意に心から敬意を表し、貴重なデータが語るものを読み尽くそう。拘縮に向き合おう。多くの人に読んでほしい書である。

A5 判 192 頁 3,200 円 + 税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357